

<特集「情報標示の諸要素」>

マレーシア語のとりたて助詞と不定表現* Focus-sensitive particles and indefinites in Malay

野元 裕樹¹, アズヌール・アイシャ・アブドゥッラー²
Hiroki Nomoto, Aznur Aisyah Abdullah

¹東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, School of Language and Culture Studies
²マレーシア国民大学社会科学・人文学部
Universiti Kebangsaan Malaysia, Faculty of Social Sciences and Humanities

要旨:本稿ではマレーシア語のとりたて助詞と不定表現を概観する。データは、本号の特集「情報表示の諸要素」のためのアンケートに基づく。

Abstract: This article overviews focus-sensitive particles and indetinfie expressions in Malay. The data is based on the questionnaire prepared for the special topic of this volume “Markers of informational structure.”

キーワード:とりたて表現, 焦点, 不定表現, 情報構造, マレーシア語

Keywords: focus-sensitive particles, focus, indefinites, information structure, Malay

1. はじめに

本稿では、特集のアンケート項目に基づき、マレーシア語のとりたて助詞と不定表現について概観する。それぞれ第2節、第3節で扱う。アンケート項目のうち、これらの節で議論されないものは、第4節に収録する。特集アンケートでの例文番号は【 】に入れて示す。

本稿で示すデータは、マレーシア国内の地域方言の差を超えて使われる、マレーシア語の標準方言のものである。標準方言においては、書き言葉と話し言葉があり、2つの変種の間には大きな差があり、ダイグロシヤ状況を生んでいる。本稿のデータは基本的に話し言葉のものである。例文はアズヌール・アイシャが特集アンケートの日本語文に基づいて作文した。

2. とりたて助詞

とりたて助詞 (focus-sensitive particle) は、文の焦点 (focus) がそれと対比される他の要素 (候補; alternative) とどのような関係にあるかを示す助詞である¹。例えば、「x だけ」は、述語が表す特性が x には成り立つものの、それと対比される他の個体には成り立たないことを表す。「健だけが直美と食事をした」という文では、健が焦点で、「だけ」は「直美と食事をした」が健には言えても、聡や仁といった、



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

* 本研究は JSPS 科研費 26770135 および頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」の助成を受けたものである。本稿の執筆は野元のメルボルン大学滞在中に行われた。滞在期間中の研究支援についてここに感謝の意を記したい。

¹ 焦点表現については、本誌前号で扱った。焦点という概念についての説明は、野元・アズヌール・アイシャ (2016) を参照されたい。

健と対比される人物には言えないことを表す。「だけ」と対称的なのが「も」である。「xも」は、x以外に、それと対比される他の個体の中にも少なくとも1つ、述語が表す特性が成り立つものがあることを表す。例えば、「健も直美と食事をした」という文は、焦点である「健」以外に、少なくとももう一人、直美と食事をした人物がいることを意味する。

「だけ」のように、焦点が述語の特性が成り立つ唯一の要素であることを表すとりたて助詞には、*saja* (文語: *sahaja*) と *hanya* がある。これらは組み合わせて用いられることが多い。*saja* は焦点を含む句の後に、*hanya* はその前に生起する。日本語の「しか」のような否定極性 (negative polarity) を持つ特別な助詞はない。(1)で関係詞 *yang* が用いられる場合、その統語構造は、自由関係節 *yang* ~「~であるの」を主語とし、焦点となる項の名詞句が述語部分に来るような擬似分裂文である。*hanya* だけが焦点を表す句の直前に生起する(2b)は、間違いではないものの、文が完結していないように感じられる。

- (1) a. Orang itu *saja* (*yang*) datang tepat masa-nya.² 【3】
 person that only REL come exact time-DEF
 b. *Hanya* orang itu (*yang*) datang tepat masa-nya.
 only person that REL come exact time-DEF
 c. *Hanya* orang itu *saja* (*yang*) datang tepat masa-nya.
 only person that only REL come exact time-DEF
 「あの人だけ、時間通りに来た。」

- (2) a. Ini di-jual di sini *saja*. 【4】
 this PASS-sell at here only
 b. ?Ini di-jual *hanya* di sini.
 this PASS-sell only at here
 c. Ini *hanya* di-jual di sini.
 this only PASS-sell at here
 d. Ini di-jual *hanya* di sini *saja*.
 this PASS-sell only at here only
 e. Ini *hanya* di-jual di sini *saja*.
 this only PASS-sell at here only
 「これはここでしか買えない。」

逆に、「も」のように、述語の表す特性が成り立つのが焦点だけではないことを表すとりたて助詞には、*pun* と *juga* がある。これらは組み合わせて用いられることが多い。*juga* は主語のあとと述語の後の両方に生起できるのに対し、この用法の *pun* は主語の後にしか生起しない³。

- (3) a. Saya *juga* nak.
 1SG too want

² Leipzig Glossing Rules がない略号は以下の通りである: PART: particle.

³ 「全然~, 全く~ (しない)」や「やっぱり~, ちゃんと~ (する)」というように断言を表す談話小辞の *pun* は述語の後に生起する。

b. Saya *pun* nak.

1SG also want

c. Saya *pun* nak *juga*.

1SG also want too

「私も欲しい。」

(4) Bagi (kepada/pada) saya *juga*.

【12】

give to/to 1SG too

「私 (に) もちょうだい。」

「だけ」の意味と「も」の意味は相容れないが、別の意味で「も」と相容れないのが対比を表す「は」である。「x も」が述語の表す特性が成り立つ要素が x 以外に少なくとも 1 つ存在することを表すのに対し、「x は」は述語の表す特性が成り立たない可能性がある要素が少なくとも 1 つ存在することを表す。3 つの個体 x, y, z から成る議論領域 (domain of discourse) を仮定すると、これら三種のとりたての間の関係性は、述語の表す特性が成り立つかどうかによって、表 1 のようにまとめることができる。論理式に見て取れるように、違いは意味構造中の否定 (¬) の位置である⁴。

表 1 「だけ」「も」「は」の関係

	x	y	z	論理式	マレーシア語
「x だけ」	○	×	×	$\forall x [P(x) \rightarrow \neg \exists y [P(y) \wedge x \neq y]]$	sa(ha)ja, hanya
「x も」	○	○	?	$\forall x [P(x) \rightarrow \exists y [P(y) \wedge x \neq y]]$	pun, juga
「x は」	○	×	?	$\forall x [P(x) \rightarrow \exists y [\neg P(y) \wedge x \neq y]]$	Pula

日本語の「は」に相当するマレーシア語のとりたて助詞は、pula である。

(5) Ayah dah balik, kan? Mak *pula*?

【13】

dad already return right mum on.the.other.hand

「お父さんもう帰って来たね。お母さんは？」

2 文目のように *pula* を含む文は、お母さんがもう帰って来たかどうかを中立的に尋ねるのではなく、お父さんとは事態が異なる可能性があることを示唆する。つまり、話者はお母さんももう帰って来ているとは思っていない。ただし、このような異なる特性の成立は、その可能性が意味されるだけであり、実際には同じ特性が成立した場合でも、*pula* の使用が意味的に逸脱した感じになるわけではない。すなわち、(5)に対する答えが「お母さんももう帰って来たよ」だったとしても、*pula* のせいで対話が不自然になるということはない。

焦点およびそれと対比される他の要素は、文脈によって決まる何らかの基準に従って尺度 (scale) を構成することがある。下の(6)であれば、例えば、地域の行事の準備をすることが期待されている度合いに応じた、「小さい子供 < 大きい子供 < 老人 < …」のような尺度を考えることができる。焦点が尺度の下限に位置することを表す、マレーシア語のとりたて助詞は *pun* である。

⁴ 「は」は、単に述語の表す特性が成り立たないこと断定するのではなく、その可能性を述べる。可能性の意味は、ここに示す論理式では省いてある。

- (6) (*Sampaikan/Sehinggakan*) kanak-kanak kecil *(*pun*) di-suruh tolong buat kerja itu. 【9】
 to.the.extent/to.the.extent children small also PASS-ask help do work that
 「小さい子供まで（も）、その仕事の手伝いをさせられた。」

上で見たように、この *pun* には累加の用法もある (cf. (3)). 「～まで」を意味する *sampaikan* や *sehinggakan* は、このことにより生じる曖昧性を解消する働きをする。可能な解釈が尺度の関与するものみに限定されるためである。ちなみに、日本語でも「まで」は *pun* に相当する「も」と共起する。しかし、マレーシア語の *pun* が義務的であるのに対し、日本語の「も」は義務的ではない。日本語の「も」は、マレーシア語の *pun* と違い、尺度の下限の指定をそれ自体の意味に含まないと言える。「も」は飽くまで累加の意味を表し、それは「まで」により発生する尺度含意 (scalar implicature) を意味論的に確定するものに他ならない。その結果、俗に「強調」と呼ばれる効果が生じる。

尺度の下限を示すとりたて助詞は存在しても、尺度の上限を表すには特別なとりたて助詞はマレーシア語には存在しないようである。下の(7)で想定される尺度は、例えば、ある家において大学生の子供が掃除することが期待される度合いに基づく、「浴室の排水溝<トイレ<…<玄関<居間<自分の部屋」のようなものである。この文では、尺度の上限を表すのに、「～まで、程度」という意味の前置詞 *setakat* が用いられている。

- (7) *Setakat* bilik sendiri, sendiri-lah yang bersihkan. 【11】
 as.far.as room self self-PART REL clean
 「自分の部屋ぐらい、自分できれいにしなさい。」

焦点とそれと対比される要素間の関係がより複雑になる場合にも、日本語には特別なとりたて助詞が存在する。しかし、マレーシア語にはそのような特別な助詞は存在せず、他の要素を用いて類似の意味が表現される。

述語の特性が成り立つ要素のうち焦点の占める比率が期待値をはるかに超えていることは、*semua(-nya)* 「(その) すべて」⁵を *belaka* 「例外なく」を *hampir* 「ほとんど」と組み合わせて用いることにより、類似の意味を表現する。

- (8) Yang ada dalam rumah itu *hampir semua(-nya)* kanak-kanak *belaka*. 【5】
 REL be in house that almost all-3 children without.exception
 「その家にいたのは子供ばかりだった。」

日本語の「こそ」は、述語の表す特性が焦点について成り立つことが対比される要素について成り立つことに比べ、特に注目に値することを示す。(9)は直訳すると「今後は失敗をすることがあってはならない」である。

⁵ (i)は、全称量化子 (universal quantifier) の *semua* を含む文の例である。

- (i) Perkara sebegini, bukan ke semua sudah tahu! 【21】
 thing like.that not Q all already know
 「そんなこと (は)、みんな知っているんじゃないか!？」

- (9) Selepas ini mesti jangan buat silap. 【6】
after this must not make mistake
「次回こそ, 失敗しないようにしよう。」

焦点が対比される要素と並ぶ一例であり, 述語の表す特性が必ずしもそれだけに成り立つというわけではないことは, 同様の意味を選択の接続詞 *ke* を使って「～か (何か)」のような形で表現できる. *ke* の後に *apa* 「何」を足すことはできない.

- (10) Penat, kan. Jom minum teh *ke*. 【7】
tired right let's drink tea or
「疲れたね, お茶でも飲もう。」

選択の接続詞は, 焦点に対する話者の低評価を表す際にも用いられる. (11a)の *atau apa-apa pun* は直訳すると「か何も」であるが, この文は「何も欲しくない」という意味ではない.

- (11) a. Saya tak mengharapkan/mahu/nak duit *atau apa-apa pun*. 【10】
1SG not expect/want/want money or anything at.all
b. Saya tak mengharapkan/mahu/nak duit *atau seumpamanya*.
1SG not expect/want/want money or the.like
「私はお金なんか欲しくない。」

焦点と対比される要素がその一部として焦点の表す個体を必ず含むことを表すことは, 副詞 *sekurang-kurangnya* 「少なくとも」や接続詞 *asalkan* 「～である限り」を用いて表現することができる.

- (12) a. Boleh bertahan selama beberapa hari jika ada *sekurang-kurangnya* air. 【8】
can endure for a.few day if be at.least water
b. *Asalkan* ada air, boleh bertahan selama beberapa hari.
as.long.as be water can endure for a.few day
「水さえあれば, 数日間は大丈夫だ。」

3. 不定表現

不定表現とは, その言語表現を聞き手が単一の指示対象 (指示対象が複数の場合は, 単一の和 (sum)) と結びつけることができないような表現をいう. マレーシア語の不定表現一般については, 正保 (2001) が論じている. 本稿では, 不定の人物を汎称的に一つまり, 「子ども」や「日本の大学生」などの下位レベルでなく, 「人」という上位のレベルで一指す 3 つの表現, *sesiapa*, *seseorang*, *orang* の振舞いを, Haspelmath (1997) の不定代名詞の類型論で用いられている意味区分に沿って記述する.

各表現の語構成は以下の通りである. まず, *sesiapa* は疑問代名詞 *siapa* 「誰」を部分重複することにより派生した形式である⁶. 口語では完全重複による *siapa-siapa* も可能である. 次に, *seseorang* は *seorang*

⁶ Haspelmath (1997: 179)は, 「部分重複による事例は知らない (I know of no case of partial reduplication)」と述べているので, これは通言語的に珍しいことのようにである. ちなみに, 特集の対象でない, 人以外

「一人」を部分重複した形である。seorang 自体は、普通名詞 orang 「人」に由来する類別詞 orang に数詞「1」の接辞形 se-が付加したものである。最後に、orang は「人」という意味の普通名詞である。不定表現が疑問代名詞や汎称名詞、数詞の「1」をベースにするのは、通言語的によく観察されるパターンである。マレーシア語ではその3つすべてが共存する。重複によるものはそれに比べると頻度は低いものの、ベトナム語やアイヌ語など、他の言語でも報告されている (Haspelmath 1997: 179)。

(13)は、特定 (specific)、つまり、その言語表現を話し手あるいは主語が単一の指示対象と結びつけることが原理的には可能になっている場合である (Kratzer 1998)。話し手が、実際に電話に出るなどして、電話してきた人物が具体的に誰であるかを知っている場合 (既知; known) も、ただ電話が鳴るのを聞いただけで、その人物が具体的に誰であるかを知らない場合 (未知; unknown) も、どちらも seseorang と orang だけが容認可能である。

- (13) Ada *sesiapa/seseorang/orang telefon tadi. 【14】
be anyone/someone/person phone just.now
「さっき誰か (が) 電話してきたよ。 / さっき電話してきた人がいたよ。」

(14)は、発話時点では現実になっていない非現実 (irrealis) の不特定 (non-specific) の例である。seseorang は、sesiapa や orang に比べ、容認度が下がる。

- (14) Mari tanya sesiapa/^{seseorang}/orang. 【15】
let's ask anyone/someone/person
「誰か / 人に聞いてみよう。」

疑問文では、3つとも可能である。

- (15) Semasa saya tiada, ada sesiapa/seseorang/orang datang? 【16】
while 1SG not.be be anyone/someone/person come
「私のいない間に誰か / 人来た？」

条件節内では、seseorang は容認されない。seseorang を用いた場合、まるで来るのが人間ではないかのように感じられるという。その理由となぜ同様のことが疑問文の(15)で起こらないのかは不明である。

- (16) Jika ada sesiapa/*seseorang/orang datang, sila beritahu saya. 【16】
if be anyone/someone/person come please tell 1SG
「誰か / 人来たたら、私に教えてください。」

否定に関して Haspelmath (1997: 32)は、直接否定 (direct negation) と間接否定 (indirect negation) の2つを区別する。Haspelmath の記述では、両者の違いは、否定辞の統語的位置による。より具体的には、直接否定では、否定辞が否定の極性を持つべき節内に生起する。一方、間接否定では否定辞が否定の極

の不定代名詞では、疑問詞が完全重複される。apa-apa 「何か、何でも」、mana-mana 「どこか、どこでも」、bila-bila 「いつでも」のようにである。

性を持つべき節を埋め込む節に生起する（上位節否定；superordinate negation）⁷。Haspelmath はまた、「～なしで」や「否定する」、「拒む」のように、それ自体の意味の中に否定を含む表現についても、間接否定に含めている。

しかしながら、Haspelmath の定義は実際の言語現象にそぐわない⁸。Haspelmath は 2 種類の否定の例として、(17)のドイツ語文を挙げる。これらの文では異なる不定表現が用いられる。例文中では、否定極性を持つはずの節を[]で示した。また、例文の日本語訳の後に Haspelmath による英訳も付けた。

(17) ドイツ語 (Haspelmath 1997: 33)

- a. [Niemand ist gekommen]. (直接否定)
nobody is come
「誰も来なかった。」(Nobody came.)
- b. Es ist nicht nötig, [dass jemand kommt]. (間接否定)
it is not necessary that someone comes
「誰も来る必要はない（＝誰かが来る）ことは必要ない。」 $\neg\Box[\exists x.COME(x)]$
(It is not necessary that anybody came.)
- cf. 「誰も来てはならない（＝誰も来ない）ことが必要だ。」 $\Box[\neg\exists x.COME(x)]$

(17a)が直接否定であることは問題ない。一方、間接否定であるとされる(17b)は Haspelmath の定義に従えば、「誰も来ない」という否定命題の必然性を意味する文であるはずである。だが、Haspelmath の付けた英訳は、「誰も来る必要はない」というように、「誰かが来る」ことの必然性を否定する文になっている。この解釈では、従属節は否定極性を持たない。否定されているのは、主節の nötig「必要だ」である。Arndt Riester 氏（私信）によれば、(17b)のドイツ語文の実際の解釈は後者であるという。

Haspelmath が意図する言語現象は、否定の作用域で異なる形式の生起が可能か否かということであろう。日本語や英語では、「か」形や some 形の代わりに「も」形や any 形が生起できる。それに対して、ドイツ語のような言語では同様の交替がない。このことは否定辞と不定表現が異なる節に生起することとは直接的には関係しない。直接否定は否定の作用域にないこと、間接否定は否定の作用域にあることである。否定の作用域にないのに否定であるというのは、不定代名詞自体が否定表現であることに他ならない（注 8 も参照）。

マレーシア語には、英語の no one やドイツ語の niemand に相当する否定の不定代名詞は存在しない。(18)–(21)のように、否定の作用域では seseorang は使われない。

⁷ Haspelmath 自身の表現では、the negation in the superordinate clause logically belongs to the subordinate clause 「上位節の否定が論理的に従属節に帰属する」である。

⁸ Haspelmath の直接否定と間接否定の区別を巡るその他の問題として、van der Wouden (2000)は直接否定が二義的であることを指摘している。すなわち、(ia)のように否定の不定代名詞 (nobody) を含む文も、(ib)のように不定代名詞 (anything) が独立した否定要素により認可される文もどちらも同じ直接否定として扱われる。

- (i) a. Nobody could travel to the Caucasus that year.
b. I don't know anything about Lezgian.

(van der Wouden 2000)

(18) a. Saya tak fikir [ada *sesiapa/*seseorang/orang* yang akan datang hari ini]. 【18】
 1SG not think be anyone/someone/person REL will come today
 「今日は誰も／人来るとは思わない。」⁹

b. Saya fikir [tiada *sesiapa/*seseorang/orang* yang akan datang hari ini].
 1SG think [not.be anyone/someone/person REL will come today
 「今日は誰も／人来ないと思う。」

(19) [Di situ sekarang ini tiada *sesiapa/*seseorang/orang* pun-lah]. 【19】
 at there now this not.be anyone/someone/person also-PART
 「そこには今誰も／人いないよ。」

(20) Benda yang macam itu, siapa-lah yang akan beli?! 【22】
 thing REL like that who-PART REL will buy
 [Takkan-lah ada *sesiapa/*seseorang/orang* yang hendak beli!]
 not.will-PART be anyone/someone/person REL want buy
 「そんなもの、誰が買うんだよ！？誰も買うわけじゃないか！」

(21) Tanpa *sesiapa/*seseorang/orang* menolong-nya, dia boleh pergi ke sana se-orang diri.
 without anyone/someone/person help-3 3SG can go to there one-CLF self
 「彼は、{誰も／人が} 助けてくれなくても、一人でそこへ行くことができた。」

自由選択 (free choice) は、*sesiapa* ととりたて助詞 *pun* 「も」(2 節参照) の組み合わせにより表される。

(22) (Itu) *sesiapa/*seseorang/*orang* pun boleh buat. 【20】
 that anyone/someone/person also can do
 「(それは) 誰でもできる。」

⁹ この例は、マレーシア語文も日本語文も従属節の表す命題が否定されているように感じられる。しかし、主節の述語を *pasti* 「確かだ」などに変えてみると、そうではないことが分かる。

(i) Saya tak pasti [ada *sesiapa/*seseorang/orang* yang akan datang hari ini].
 1SG not sure be anyone/someone/person REL will come today
 「今日は {誰かが／*誰も／人が} 来ると確信できない。」

この文では、「誰かが来る」という肯定の命題に対する話者の確かさが否定されているのであり、「誰も来ない」という否定命題は解釈に関与しない。述語が「思う」の場合に、「Pだと思わない」が「Pでないと思う」を意味しているように感じられるのは、「思う」の意味の希薄さに起因する。つまり、ある平叙文を発話すること自体、発話内容が話者の思っていることであることの表明であり、あえて「思う」と言ったところで、総合的な解釈に大きな影響は与えない。そのため、「Pだと思わない」⇒「Pでないと思う」式の語用論的推論が意味論的意味により阻まれることなく成立する。

ちなみに、野元の判断では、(i)では「誰も」は使えない。van der Wouden (2000: 注4) によれば、オランダ語でも、主節の述語の違いが従属節中の不定表現の選択に影響を与える。

比較の基準 (standard of comparison) でも同様に, *sesiapa* ととりたて助詞 *pun* 「も」の組み合わせが用いられる。

(23) *Fatimah menari lebih baik daripada sesiapa/*seseorang/*orang pun.*

Fatimah dance more well than anyone/someone/person also

「ファティマは誰よりもうまく踊った。」

以上の結果をもとに, Haspelmath 式の意味地図を作成すると, 図 1 のようになる。 *sesiapa* の領域は図の右側から左側へ伸びる。一方, *seseorang* の領域は左から右へ伸びる。汎称名詞 *orang* 「人」は, 比較の基準と自由選択以外のすべてをカバーする。前述のように, 直接否定と間接否定は, Haspelmath の定義とは異なる定義に従っている。本稿の定義では, 直接否定はマレーシア語とは無関係である。

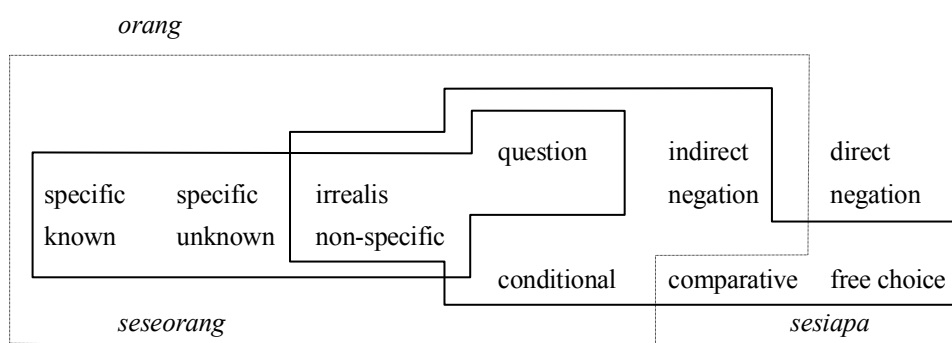


図 1 マレーシア語の「誰／人」の意味地図

4. その他

4.1. 主題の照応

(24)は, 主題 (=その文の表す命題が何に関してであるか) が後続文の空主語により照応されることを示すものである。一文目は, (di) *tanah ini* 「この土地 (で)」が主題, *sayur-sayurannya* 「その野菜」が主語となっている, 「A は B が C だ」という主題・題述構文である。主語には, 主題を照応する 3 人称代名詞 *-nya* が含まれる。二文目には明示的な主語は生起しない。その代わりとして空主語を想定すると, この空主語は一文目の主語の「野菜」ではなく, 主題の「この土地」を照応する。

(24) (Di) *Tanah ini sayur-sayuran-nya tumbuh elok. Jadi, mungkin boleh di-jual* 【1】
at land this vegetables-3 grow well so maybe can PASS-sell
dengan harga yang tinggi.
with price REL high
「この土地は野菜がよく育つ。だから高い値段で売れるだろう。」

(25)も, 主題が後続文の空主語により照応されることを示す例である。(24)との違いは, 一文目が主題・題述構文の形式を取っていない点である¹⁰。一文目の主題は「私」である。二文目の *hari ini* 「今日」は,

¹⁰ 日本語の「私は頭が痛い」に対応する主題・題述構文は再述代名詞 (resumptive pronoun) の有無にかかわらず, 容認されない。

この文脈では、主語ではなく、時を表す修飾句である。(24)と同様、明示的な主語は生起せず、その代わりの空主語は一文目の主題である「私」を照応する。例文の日本語訳はマレーシア語の構文を反映するような直訳に近い訳を付けてある。

- (25) a. Kepala saya sakit. Jadi, hari ini cuti. 【2】
 head 1SG hurt so today take.off
 「私の頭が痛い。だから今日は休む。」
 b. Saya sakit kepala. Jadi, hari ini cuti.
 1SG headache so today take.off
 「私は頭痛だ。だから今日は休む。」

4.2. 談話小辞とモダリティ表現

日本語には、文の表す命題内容が話し手・聞き手の知識・信念体系とどのように関係するかに関する話し手の判断を表す終助詞が存在する。「ね」や「よ」がその例である。マレーシア語では小辞 *lah* が似た意味を持つ（詳細は Goddard (1994) を参照）。また、日本語や英語と同様、命題内容の実現可能性に関する話者の判断を表すのには、種々のモダリティ表現が用いられる（詳細は野元 (2011) を参照）。日本語では「～そうだ」や「～らしい」がその例である。マレーシア語の例としては、動詞 *nampak* 「～に見える」や小辞 *macam* 「～のような」がある。日本語同様、2つの要素の組み合わせも可能である。なお、(27)の *saja* は英語の *just* に相当する談話小辞であり、限定を表すとりたて助詞「～だけ」ではない。

- (26) Bahasa Inggeris awak bagus-lah. 【23】
 language English 2SG good-PART
 「君は英語がうまいね。」
- (27) Awak nampak macam bosan saja-lah. 【24】
 2SG look like bored just-PART
 「君は退屈そうだね。」
- (28) Esok pun macam sejuk-lah. 【25】
 tomorrow also like cold-PART
 「明日も寒いらしいよ。」

参考文献

- Goddard, Cliff. 1994. The meaning of *lah*: Understanding “emphasis” in Malay (Bahasa Melayu). *Oceanic Linguistics* 33: 145–165.
- Haspelmath, Martin. 1997. *Indefinite Pronouns*. Oxford: Oxford University Press.

-
- (i) a. *Saya kepala sakit. 【2】
 1SG head hurt
 b. *Saya kepala saya sakit.
 1SG head 1SG hurt

Kratzer, Angelika. 1998. Scope or pseudoscope? Are there wide-scope indefinites? In Susan Rothstein (ed.). *Events and Grammar*, 163–196. Dordrecht: Kluwer.

野元裕樹. 2011. 「マレーシア語のモダリティの概要」『語学研究所論集 16』, 130–150. 東京外国語大学.

野元裕樹, アズヌール・アイシャ・アブドゥッラー. 2016. 「マレーシア語の焦点表現と名詞述語文」『語学研究所論集 21』, 171–189. 東京外国語大学.

正保勇. 2001. 「マレーシア語の不定表現」『語学研究所論集 6』, 71–91. 東京外国語大学.

van der Wouden, Ton. 2000. Indefinite pronouns: A review of Haspelmath 1997. *Linguistic Typology* 4: 281–291.

執筆者連絡先: nomoto@tufs.ac.jp (野元), aznuraisyah@ukm.edu.my (アズヌール・アイシャ)